朝日曽雌村

〔都留市〕

朝日曽雌村は、都留市の東端に位置し、桂川の支流朝日川の上流域にある山あいの村である。枝郷大平（おいだいら）からは大平川が西流して、隣村朝日馬場村で朝日川と合流する。

集落は、朝日川と大平川流域にあって、大平・久保・神願戸（神門）の枝郷を形成している。枝郷大平と母郷曽雌との間には七五〇メートルの山があり、母郷と枝郷の間をさえぎっている。また地内には縄文時代の落合遺跡があり、土器・石器類が出土している。

朝日曽雌村は、朝日七郷と称し、朝日馬場・朝日小沢・与縄・井倉・玉川・戸沢とともに一村であったが、寛文九年（一六六九）の検地を契機にして分村した村である。この分村にあたっては、隣村朝日馬場村との間で、耕地と民家が複雑に入り組んだ状態がもたらされた。そうした耕地の入り組み状況については、隣の朝日馬場村絵図からうかがうことができる。ここに収めた朝日曽雌村の村絵図からは、そうした入り組み状況を知ることができない。それは、朝日曽雌村の村絵図が『甲斐国志』編さんのために提出されたもので、村の概況がわかればよい程度に描かれたことによろう。

『甲斐国志』は、隣村との村境について次のように記している。西は「神願戸原（シンガンドバラ）・大平ノ山足、朝日馬場村」と境としている。村絵図では「神門原」と記されているが、この所は朝日馬場と入り組んでいる場所にあたる。西南は「猿焼・一ノ沢・中ノ沢・本沢」などの山峰を境にして戸沢村と境としているが、村絵図には「猿焼」「中ノ沢」「本沢」などの地名はみえる。東南は「岩殿沢ノ峰ニ至リテ」道志村と境、そして東は、「大ダミ峠ヲ限リ」秋山村と境とある。当村の村絵図には「岩殿沢」は記されているが、「大ダミ峠」は記されていない。秋山村の絵図には「おゝだミ」峠を見ることができる。この大ダミ峠は、別名雛鶴峠といい、護良親王（もりながしんのう）の首級を携えて、鎌倉から逃れて来た雛鶴姫の伝説をのこすところでもある。その伝説の首級は、現在、朝日馬場村の石船神社に大切に保管されている。

北は「山峰続キ」朝日馬場村と境とあるが、これは、朝日馬場村の村域が大平集落の背後の山までのびていたことによる（朝日馬場村絵図参照）。

当村は、本書所収の文化三年（一八〇六）の「村明細帳」によると、村高一〇〇石四斗一合、うち田高一〇石七斗四升九合、畑高八九石五斗三升六合の畑勝ちの村であった。田高一〇石七斗余の反別一町六反四畝二歩であるが、そうした田は絵図の中央部を東西に流れる朝日川沿いと、大平川沿いの「久保かいと」にあったことが村絵図からもわかる。朝日川沿いには、「東窪田」「下河原田」「神門下田」などとみえる。畑は一七町三反六畝二〇歩あったが、それらの畑は村絵図では黄色に彩色されて描かれており、曽雌村での畑の広がり様を知ることができる。そうした畑はほとんど皆傾斜地であり、現在は山林に地目変更されたところが多い。

田畑合せた反別は一九町歩余りで、この面積では、一戸当り平均反別は約一反七畝歩にしかならない。したがって、山の傾斜地を利用した焼畑も広く行われていた。

朝日曽雌の集落

そうした焼畑が古くから行われていた形跡は、「焼むろ山」「猿焼」などの地名からもうかがわれる。また、村絵図に「炭焼場」がみられるように、当村では炭焼が盛んに行われていた。そうした炭焼や薪の切出しなどの山稼ぎとともに、養蚕・絹織が女性の仕事として広く行なわれていた。このことは、「村明細帳」にも、「男ハ農業作間ニ薪切、女ハ飼蚕、絹織かへ仕候」とあることからもわかる。

文化三年（一八〇六）当時の家数は一二〇軒で、人数は五八六人（男二八九・女二九六・僧一）、馬は三五疋を数えた村であった。ちなみに、昭和五十五年の世帯数・人口は、一四二世帯・六五二人となる。この一二〇軒の人々は、母郷曽雌のほかに枝郷大平・久保・神門に集落をつくって生活していた。母郷曽雌は寺社の描かれている付近であり、枝郷大平は、北側の「字さかい畑」と記されている所に家が描かれているが、そこが大平の集落である。神門は、「神門原」と記されている所に描かれた集落をいう。久保は村絵図に家が描かれていないが、「久保かいと田」と記された所から少し西よりをいい、この時期にはすでに家があったと思われるが、この村絵図には家が描かれていない。

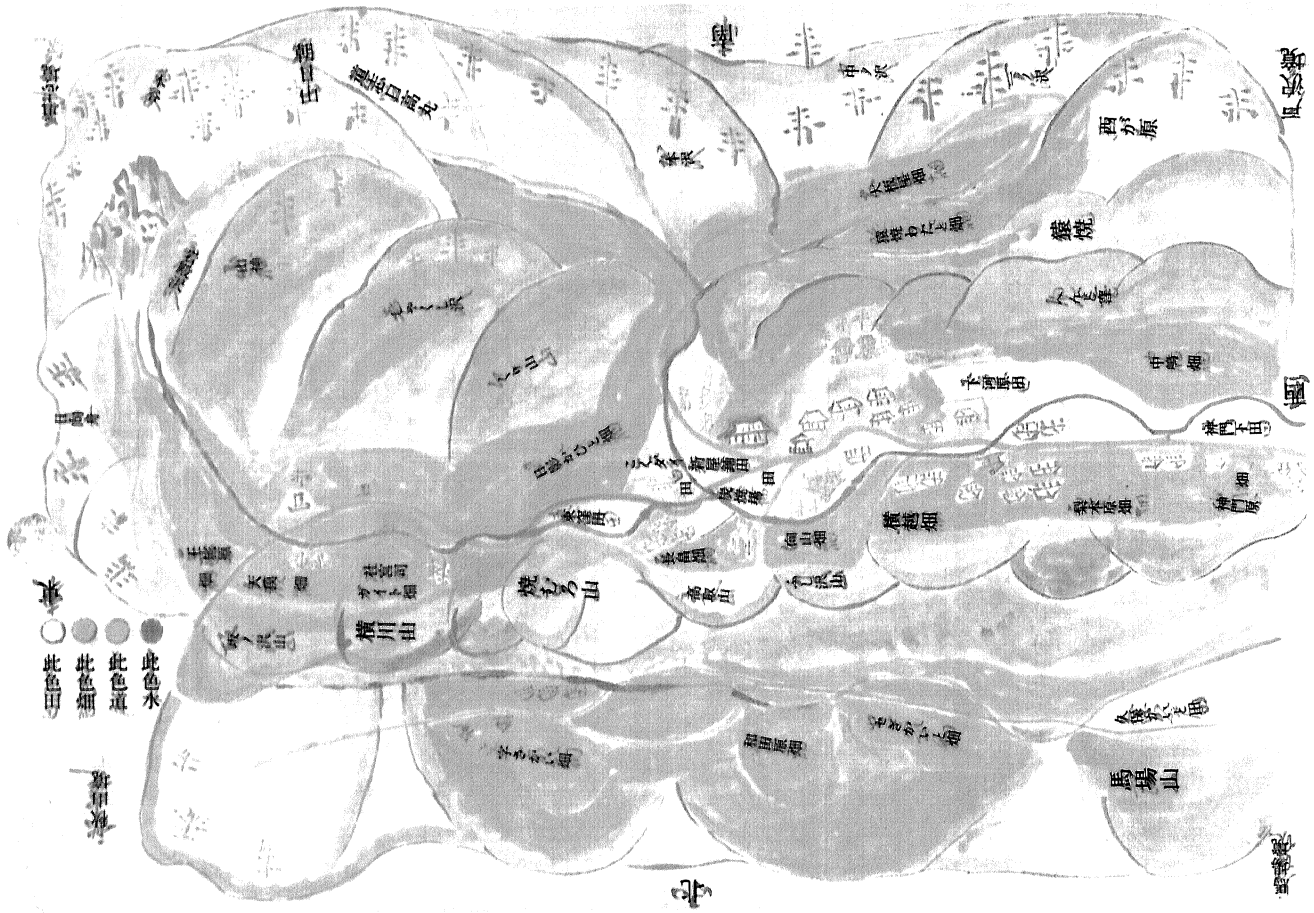
ところで村絵図を見ると、絵図の中央を東西に走る道が描かれているが、この道は「村明細帳」に、「王旅筋往来、当所より秋山・津久井県・江戸迄の通路」とあるように、東隣の秋山村を通り、相州津久井へ至る道であった。現在この道は、秋山村をつなぐ主要道として利用されており、県道四日市場・上野原線という。昭和六十一年には新雛鶴トンネルが開通し、都留市と秋山村の距離を短くした。一方、朝日馬場の石船神社のところから分かれて大平に至る道は、鈴懸林道を通って朝日小沢村へと通じている。

村絵図の中央部に朱色で描かれている建物が伝昌寺である。この寺の本尊は薬師で、天文年間（一五三二～五五）、以三有公禅定という者が一小庵を造り、小随庵と称していたが、江戸時代に入り、天和（一六八一～八四）の頃、谷村長生寺の十五世一卓是教和尚がこの寺に退隠し、この時、伝昌寺と改称したと伝える。そして、宝暦年中（一七五一～六四）、薬師の像を新彫して、古本尊の小仏や十二神を躰中に収めたという（『甲斐国志』仏寺部）。

そして、二つ並んで朱色に彩色された神社は、「村明細帳」にみられる神明宮・八幡宮で、当村の氏神であった。この神社は、現在、五社神社という。この外、「村明細帳」には、大平の薬師堂（馬場村本光寺持）・熊野権現（吉兵衛持）、久保の日月小宮（門左衛門持）、神門の八王子権現（新左衛門持）、母郷曽雌に六道辻地蔵堂（林持）が記されている。大平の薬師堂には嘉吉二年（一四四二）の卒塔婆石（板碑）があり、また、母郷の川橋向の十王堂屋敷跡にも貞和年中（一三四五～五〇）の卒塔婆石一枚があったが、これは伝昌寺へ移したと記している。この板碑は、長さ九一センチ、幅二一センチ、厚さ一・九センチの緑泥片岩で、昭和五十年に都留市の文化財に指定され、現在本光寺に保管されている。

大平の集落

村絵図の東端付近で、道の南には、二つの墓石が描かれている。この二つの墓石のうち、左は雛鶴姫の墓であり、右はその家来の墓といわれている。そしてそこには、「伴の松」と称する名木がそびえている。雛鶴姫とは、大塔宮護良親王の側室で、親王が非業の死をとげたあと、身ごもったまま親王の首級を抱いて逃れてきたが、この地で亡くなったという伝説上の人物である。当村や秋山村には、この雛鶴姫にかかわる地名があるが、村絵図にみられる「王旅原」もその一つである。



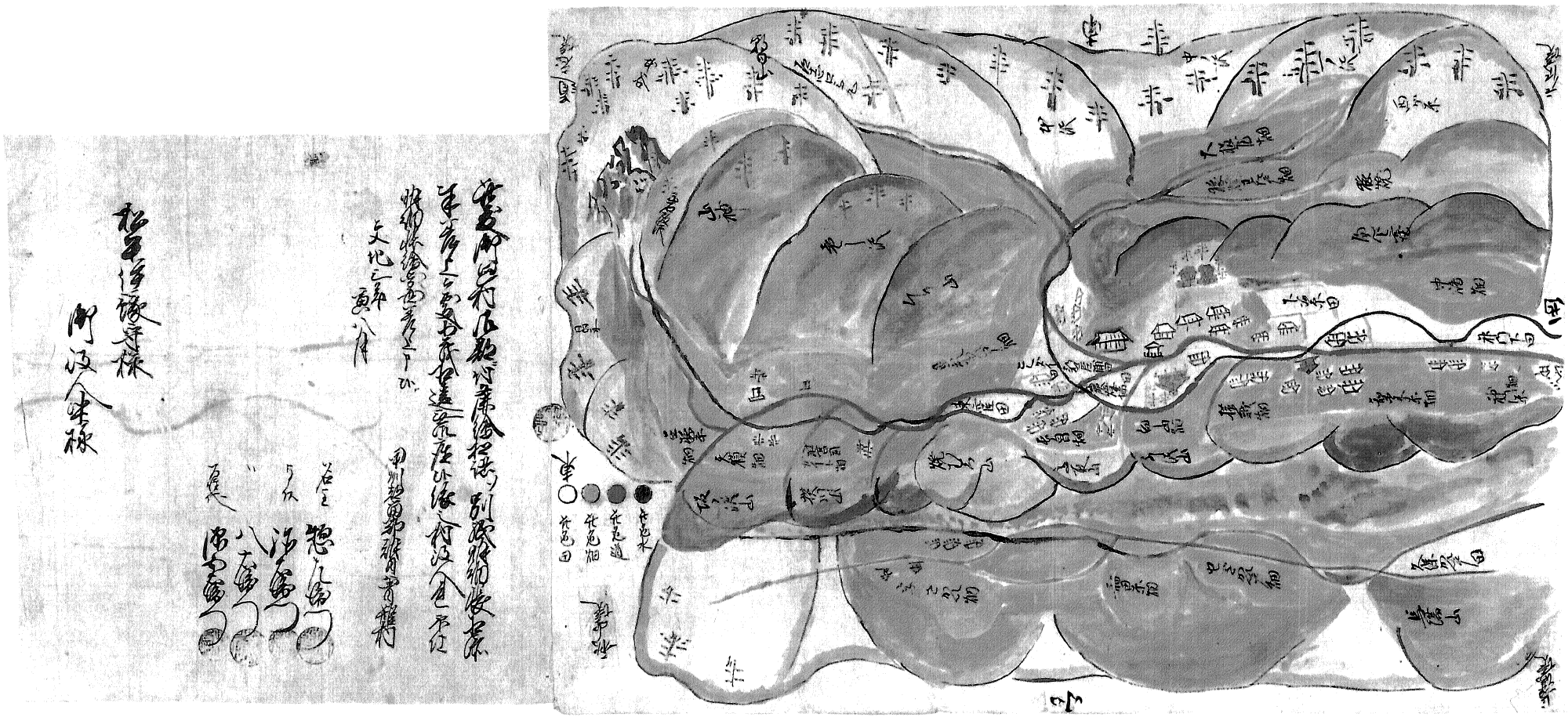
此度御廻村御尋ニ付絵絵相認メ別紙明細帳相添
差上ケ処少も相違無御座候依之村役人連印仕
明細帳絵図面差上申候

文化五年
寅八月

甲州都留郡朝日曽雌村

名主　惣左衛門㊞
与頭　弥右衛門㊞
同　八右衛門㊞
百姓代　源五右衛門㊞

松平伊予守様
御役人中様



29　文化３年(1806) ８月　朝日曽雌村絵図　都留市蔵(森嶋家文書)　325×702

三〇　文化三年（一八〇六）八月　朝日曽雌村明細書上帳

（表紙）「　文化三年
寅八月
明　細　書　上　帳
甲州郡内領朝日
曽雌村　」

奉差上明細帳

此度郡内領村々御廻村被遊、古来由緒之者・古筆之類・古キ墓所・字・地名・深山・谷川ニ至迄、委鋪御改、譬無証拠ニても、昔古より言伝へ、老人之申伝、山里ニ不限、別ニ相替り候義ハ不包、有様ニ可申上旨被仰渡候ニ付、此度村役人相改、本村枝郷まで乍恐明細帳有増之義左ニ奉申上候

文化三丙寅八月

明　細　帳

甲斐国都留郡朝日曽雌村

一高百石四斗壱合内
（後筆）「反別壱町六反四畝廿六歩」
田高拾石七斗四升九合
畑高八拾九石五斗三升六合
（後筆）「反別拾七町三反六畝廿歩」
（後筆）「反別拾九町七畝拾歩
桑四拾五束半」

一御高札三枚　但　正徳年中弐枚
明和年中壱枚

一曹洞宗下谷村長生寺末東光山伝昌寺
（後筆）「本尊薬師如来」
御除地四畝歩（後筆）「分米四斗四升」
（後筆）「長生十五世、二世円山喝音和尚ニ至テ法寺ニナル」
開山一卓是教大和尚　貞享四丁卯年五月二日遷化
以三有公禅定門　天文十七申十月廿八日死
天向祐公大姉　同年十二月十五日死ス
（後筆）「元小随庵ト称ス度々焼亡ノ患アリシ故、開山伝昌寺ト改ト云、宝暦中坐像彫刻シ十二神小像ヲ其腹中ニ収」

一当村文化三寅人別五百八拾六人（男弐百八拾九人　女弐百九拾六人　僧壱人）

一枝郷　大平　久保　神門　本村枝郷共都合家数百弐拾軒

一太平村薬師堂　馬場村本光寺持（見捨地壱畝程）
本尊薬師　恵心之御作
嘉吉二年之卒都婆石

同所一熊野権現小宮　柊古木壱抱余　間数六間　高弐間余　吉兵衛持
久保村一日月小宮　門左衛門持
神門一八王子権現　はへたの古木九抱　新左衛門持
本村一六道辻地蔵堂　村持
同所村持一川橋向十王堂屋鋪跡ニ卒都婆石壱枚（貞和年中とあり今伝昌寺へ引申候）

神明宮
八幡宮　両社続当村氏神（神主井倉村美濃守　祭礼七月廿一日古木あり　見捨地壱畝余）

一落合稲荷の木（かや）大木　見捨地少々
此所より右之方深山本谷筋北向之高山、左ハ王旅筋流水此所ニ落合、末流井倉より桂川へ落入申候
右之方村里より五丁程入、山神之森より左之谷道志口ト号、此奥ニ杉大木御座候、昔古之老人言伝へ、此杉之根ニ歳之神対埋（躰）候義ハ昔古朝日山村と申、其節
一高五百四拾五石壱斗五升ニて
両朝日・与縄・井倉・戸沢・玉川、朝日五ケ村と申、如何子細ニ御座候哉、右村々より歳神一同取集、此処ニ埋、爾今歳神之杉と号、右村々ニ歳神無御座候由申伝へニ御座候
立戻落合より左之方

一堂屋鋪　王旅通筋往来之片辺ニ御座候

一王旅筋往来、当所より秋山・津久井懸（縣）・江戸迄之通路
此道筋一社宮司　源五右衛門地先
同所道筋（溪）一天　猟　源兵衛地先

一王旅坂　此麓ニひなづる姫の墓所、夫より打続壱丁程下ニ家来の墓所とて、爾今御座候
此奥野王旅原

一岩殿沢　此所朝日山第一之原山、岩石之地

一日向船　山之頂上ニ船之如く之広地

当所より一見越　西ハ馬場村瀧之上
東ハ秋（山カ）ハ王野入
北ハ鳥沢あふぎ山
南ハ道志あふむれざす

当村家業　男ハ農業作間ニ薪切　女ハ飼蚕絹折（織）かへ仕候

右之通村中相改、明細帳仕立奉差上候、依之村役人連印仕候、已上

甲州郡内領朝日曽雌村
文化三年丙寅八月日　名主　惣左衛門㊞
組頭　源右衛門㊞
同断　八右衛門㊞
百姓代　源五右衛門㊞

松平伊予守様
御役人中様

○「甲斐国志編纂資料　明細書上書類　村里之部　玄」より。
（富士吉田市　加々美四郎家文書）